〔嚴助往年記上〕天文九年庚子二月十日　當春世上大キヽン、非人數千萬、餓死不レ知二其數一、於二上京下京之間一、春夏中、每日六十人計、死人捨之云々、於二誓願寺一、非人施行、春中有レ之、

〔妙法寺記下〕天文十辛丑、此年春餓死致候テ、人馬トモニ死ルコト無レ限、百年ノ内ニモ無二御座一候ト人人申來リ候、十死一生ト申候、

〔玉露叢十三〕一同年〇寛永十八年ノ暮ヨリ十九廿年ノ春マデ天下飢饉、依テ餓死ス、尤乞食道路ニ散亂ス、

〔一話一言十五〕米金の事　又寛永ノ末迄ハ、八木ノ直段、北國ノ米五斗ノ俵、銀六匁ニ賣シヲ予モ覺ケル也、其昔午歳〇寛永十九年大飢饉ノ時、天下一統飢死ノ者多、予若年ノ時、父ト連、賀州ヨリ越前へ行ケル時、小松ノ串野ト云所ヲ通シニ、松原ノ内ニ石瓦ノ如白ク見ヘケリ、朝霧深フシテ慥成貌見分ガタシ、依レ之馬形ニ尋ケレバ、アレコソ午ノ歳ノ大飢饉ノトキ、飢死ノ者ノ首ニ繩ヲ付テ、此所へ在々ヨリ捨タル其骸骨ドモナリトゾ申ケル、サナガラ石川ノ水ノ干タルガ如也、〇中略

寛永飢饉の事　寛永年中、午年天下一統ノ飢饉ニハ、田ノ畔ノ草ヲアラソヒ、木葉松竹ノ翠ヲ拔食セシナリ、

〔大猷院殿御實紀四十九〕寛永十九年二月、すべてこの月より、五月に至るまで、天下大に飢饉し、餓莩道路に相望む、また身に一衣覆ふ事もなし得ず、古席をまとひて倒れふすもの巷にみちたり、よて町奉行をして各その郷里をたゞし、領主代官に命じ、飢者をたすけて、その故郷にかへさしめ、その外は市中に假屋を設け、旦暮粥をつくりて、飢者に施行せられしとぞ、家譜、寛永系圖、天享東鑑、

〔十三朝紀聞三靈元〕延寶三年正月、天下大飢、餓莩載レ路、京師棄兒、空屋比比而在、大將軍〇徳川家宣奉レ勅賑レ之、設二場于北野四條磧五條磧諸處一、與レ粥及錢米、自二三月一至二五月一而止、慶長亂後、比歳豐稔、京師斛米、價率銀十八錢、其後至二二十四五錢一、既而漸次涌貴、平價不レ下二四十錢一、至是斛銀百三四十錢云、